

ルガー

上水敬由

最近読んだ翻訳ミステリ二点の表紙（カバー）に描かれた絵が、どちらも本の内容とあっていないことに気づいたので、そのことを書いておく。

ひとつはジェット旅客機の墜落事故と原因調査にテロリストをからめた作品で、当然のことながら旅客機が重要な役割を果たしている。

たとえば前半で墜落してしまう機体は「四基のエンジンから空気取入口やファンやコア・エンジンや排気システムを覆うカウルをはずすのに」とされ、後半であわや墜落しそうになる機体は「左舷に二基あるエンジンの片方、停止させた第三エンジンと同じく内側のエンジンの出力を落とせば」とされている。

つまり作者がここで「四基のエンジン」をそなえた旅客機を言っていることは明らかだが、上下二巻の表紙にわざわざ構図まで変えて描かれているのはエンジン二基の双発旅客機なのだ。

もちろん編集者の単なる見落としにすぎないだろう、とは思う。

もうひとつは一九九〇年代メキシコ国境近くのさびれた地方都市を舞台とする（別の出版社による）作品。いわゆるクライム・ノヴェルで、その性格からさまざまな場面にいるような銃が登場する。

それらについてショットガンやライフルとしか書かれていないものもあるが、製品名をはっきりと書いているものもある。たとえばワルサーMPKやベビーイーグル。「ヘッケラー&コッホのサブマシンガン」も入れていいだろう。いずれも第二次大戦後に製造された銃で、作者なりの必然性があって登場させたことはたしかだ。そしてその中に主人公が愛用する拳銃としてルガーが出てくる。

彼はたんに「ルガー」としか書かないが、この銃は一九八〇年代以降、高いコストパフォーマンスによって広く使われた米国スターム・ルガー社の製品に違いない。

ハリウッド版戦争映画に親しんだ世代としては、ルガーといえば旧ドイツ軍のルガーP08をまず思い浮かべてしまう。しかし作品の背景や年代、そしてなにより彼がこの銃を選んだ理由についてまったくふれないことからみて、主人公がそんな骨董品のような銃を使うことはありえないだろう。

ところが、表紙に描かれているのはなぜかそちらの「ルガー」なのだ。出版不況が編集力の低下に直結しているわけではないだろうが、これでは悲しい。

画像（イメージ）の備えるおそるべき力は、たとえば、われわれがいまだに『守屋家本騎馬武者像』を足利尊氏として記憶していることから明らかのように、一度すり込まれると、その後に獲得した知識によってもなかなか消し去ることができなくなる。

かつて歴史の副読本としてマンガを子どもたちに読ませることに反対した論拠のひとつがこれだった。その意見が妥当であったかどうかは別として、同様のことは本の表紙や小説の挿絵などによっても生じる。

作者の意図に反して、作品の内容と異なる、あるいは誤読に導くおそれのある画像を選択しないためには、やはりその作品をきちんと読むことしかないのだろう。